

# 結草

kusamusubi

No.17

publishing house:moriyama 2-19-52 Kanazawa  
Jodo Shinsyu Jhokoji phone 076-252-4922  
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2014.12.01

## 教えを聞き取る

道因寺住職

相馬 豊

皆さん、こんにちは。今ほど紹介を受けました、白山市の道因寺の住職をしております相馬豊と申します。よろしくお願いたします。

今年も浄光寺さんの報恩講にご縁をいただきました。報恩講は、私たち真宗の門徒にとって、一番大切な仏事と言ってよろしいかと思いますが、報恩講という長い歴史の中

を通じて今私たちがその報恩講に出会う「時」と「場所」を得たということが先ず大事なことでないかなと思います。親鸞聖人が亡くなられてもう既に七五〇数年経ちまし

たけれども、しかしその親鸞聖人が残された言葉あるいは課題とされた事柄、そのことを鏡として私たち一人ひとりが今抱えているこの身の問題を訪ねていくということがこの報恩講という大事な仏事になつていくのではないかと思いません。

## 教えを聞き取る

仏教という教えは、最初から仏教という教えがあつたのではなく、釈尊という方が一人の人間として生まれ、その人間として生きる苦悩

や悲しみの中で見出されたのが教えというものでないでしょうか。その釈尊によって見出された教えが、私たち一人ひとりが抱えている苦悩を包み込んでいる。それが教えというものだと私は思っています。また、その教えを聞くということは、自分の人生、自分が人間に生まれてきたということに本当に頷いていくことです。その道を教えてくれるのが、教えというものではないかと思えます。その教えを聞くということとはただ聞くのではなくて、聞き取るといふことが非常に大切な事柄だと思えます。

毎月お参りに行っているお家のおばあちゃんが亡くなられて、そして後に残ったお母さんがこんなことを言われておりました。亡くなつたおばあちゃんが内報恩講を迎えるにあたって、お内仏の仏具をひとつひとつ丁寧に下ろされて、そしてその仏具のおみがきをする時、そのおばあちゃんが嫁いできた私に常々こういうことを語りかけておられたそうです。

「お前な、仏具を磨くというのはなあ、ただ磨けばええのと違うんやぞ。自分を磨くということやぞ」とこういうことを繰り返して、繰り返して仏具を磨く時に私に語りかけてくださいました」とこういうことを話して下さいました。

そのおばあちゃんが、そのお家へ嫁いできてから何十年とその報恩講に出会ってきた。しかし、ただ仏具を磨くといつて、それで済むのではない。自分を磨いていくことが大事なんだと。その苦勞をまたその家に嫁いできたお母さんがそのおばあちゃんの言葉を聞き取った、ここが大切な事柄なのではないでしょうか。

ただ聞くのではなくて、亡き方の言葉を聞き取って、私たち一人ひとりの自分の有り様をもう一度確かめてみる。それが実は報恩講ということと、私の出会いということになつていくのではないかと思えます。その聞くということと、聞き取るということを少し中心にしながら、時間の許す中で、ご一緒に聴聞したく思っております。

## 本願の出処

真宗の大切な言葉の中に「本願」という言葉遣いがあります。「弥陀の本願」、「如来の本願」、「本願念仏」というふうに本願という言葉が非常に大切な言葉として扱われていきます。また皆さんも何度も耳にしている言葉ではないかと思えます。

具体的には、生活の中で私たちは、どこでその本願ということを確認しているかと申しますと、一つはお内仏のご本尊。あるいは浄光寺さんの本堂のご本尊。そのご本尊である阿弥陀さまの後ろ側には御光があります。その数が四十八本。

生活の中で私たちは、本願ということ、我が家のお内仏のご本尊を通してこの目で確認をしたり、あるいは浄光寺さんの本堂に来て、その本願というものの姿を私たちは目にする事ができます。

またその本願ということが、『仏説無量寿経』の中で説かれているということも聞き及んでいます。そして、その数が一願から四十八願までということも聞き及んでいます。さらに私たちはその本願の内容を確

認しているわけですから、いつの間にか大切なことを忘れていくということがあります。

それはその本願がなぜ起こったのかということ、その本願を起さなければならなかったのは一体なぜでしょうか。本願がなぜ起こらなければならなかったのか。

私たちは一願から四十八願というかたちは知っているんです。ところが、その本願がなぜ起こさなければならなかったかということをついつい忘れていくのでないかなあと最近思っています。改めて、その本願がなぜ起こってきたのか訪ねてまいりたいと思います。

私たちは、報恩講の折でも、平生の生活の中でも『正信偈』のお勤めをいたします。その正信偈の冒頭のところに「歸命無量寿如来、南無不可思議光、法蔵菩薩因位時、在世自在王仏所、親見諸仏浄土因、国土人天之善悪、建立無上殊勝願、超発稀有大弘誓」。まず正信偈の冒頭のところに今申しました言葉が文字が並んでおります。実は、ここにそ

の本願が説かれてくる大きな理由が書き述べられています。

「法蔵菩薩因位時、在世自在王仏所」。一人の国王が世自在王仏という仏さまに出会われた。その世自在王仏のお話を聞いた時、その王様が非常に感銘を受けて感動された。その感動と感銘の中で、私もあなたのような尊い仏になっていきたいと願われた。そこでその国王が何をされたかといいますと、国王という地位を棄て、国を棄て、一人の沙門となつて名を法蔵と号すところというふうにいわれます。

「出和雅音」 釋受任



## 場所

最初から法蔵という方がおられたのではなくて、一人の国王がおられた。その国王が世自在王仏と出会われて、その時に「在世自在王仏所」、「在世」在りし時に。どこに在りし時かといったら「所」です。つまり場所です。実はこの「場所」ということが、実は非常に大切なのです。

私たちもそれぞれがこの所、場所を持って生活をしています。私たちがいいますならば、家庭という所、場があります。お勤めになっている方は、それぞれ勤めている場、所があります。ところが、その場が本当に安心できる、自分がのびのびと穏やかに過ごせる場所かどうかということが一番の問題でないでしょうか。

実は、法蔵と名乗る前には国王で、その国王であったという時は、なかなかこの場が安らぎの場になつていなかった。なぜ国王でありながら安心して穏やかに暮らせないかといいますと、やはり隣接する国からいつ攻められてくるか分からない。あるいは信頼している家臣からいつ裏切られるかも分からない。そして、国

を治めているけれども、その治めている人たちが私の政策に対していつ反旗を翻すか分からない。常に不安というものを抱え込んでいたというのが国王の時代です。

それは今日の新聞を見ると、やはり同じようなことが出ておりました。二〇一三年度の公立小中学校、それから養護学校を含めてのいじめの件数ということが新聞でも報道されておりました。二〇一二年よりもいじめの件数は減ったという記事が載っております。文部科学省の統計でいいますと、18580件。そのうち自分の命というものに危険が及ばされるような重大事件として成り得るものが一八一件。こういうふう

に載っております。

私たちは、学校という場の中に身を置き、そしてそこで人と人の係り、つながりの中で大切なことを学び成長していく、そういう場が学校という場所です。ところが現在の学校という場所は、人と人の係わりを大事にし、育て育んでいくという場ではなく、育て育んでいくという場ではなくなりました。比較し競争す

ることによって、いつの間にかいじめというものがどんどん、どんどん増えてきた。まさに場所という所が私たちにありながら、人と人との係わりが崩れてきている。そうすると、学校という場が本当に安心で穏やか所に現在はないんだなあと、そういうことを今日の新聞の報道を見ながら感じておりました。

### 汝自当知・非我境界

それはまさに国王が世自在王仏に出会うまで、自分の中に不安を抱き、藻掻いていた姿と全く同じではないでしょうか。その国王が世自在王仏と出会うことで本当に自分が穏やかに安心できる場所を得ることができました。それが「在世自在王仏所」とこういう言葉で書かれています。そして、その世自在王仏の所で教える聞いて、色んなことを聞き取っていく中に、一つの大きな問題が出てきます。「どうすればあなたのような尊い仏になれるのでしょうか。私もあなたのような仏様になりたいのですが、どのような学びをし、どのような行を積み重ねられるのでしょうか」と、このようなことをお尋ねになられました。それに対して、世自在王仏は次のように答えられました。「それは大変大切な問いです。しかし、その問いというのは、ご自分で起こされた問いでしょう。自らが起こした問いに対してはまず、自らが尋ねていきなさい」と。「汝自当知」(『仏説無量寿経』・真宗聖典一三頁)。

あなたが起こした問いは、とても大切な問いですけれども、その問いは、人に尋ねて答えを求めるのではなくて、汝自ら当に知りなさい(汝自当知)。こういうふうには世自在王仏が法蔵に答えられた。

そのことを聞いた法蔵が、今度はどういふふうには世自在王仏に答えられたのかと申しますと、「はいそのとおりなんです。自分で起こした問いは自分で尋ねていかなければならないということは分かっています。ところが一つ分らないことがあります。自分の起こした問いなんですけれども、その自分が一体何者であるかという問いが自分ではわかりません」と。「非我境界」(同上)。自分で自分のことがよくわからないんです。私

は一体何者で、何を求めてどうなりたいのか、私にはわかりません。こういうふうには法蔵が世自在王仏に問いかけられたことに対してご自分で答えられました。

では私たちはどうでしょうか。私たちの有り様は一体どんな有り様かと申しますと、「如自当知」に對しましては私たちは「我自当知」。自分のことは自分が一番知っています。ことうやうやって毎日を送ってきているのではないのでしょうか。今日まで自分が生き続けてきた経験、体験を元にして自分というものを大事に大事に育ててきました。だから私たちはどこまでも自分のことは自分が知っています。こういう有り様を常々してきてたのです。

また「非我境界」、一体何者であるのかということが分かりませんということに対しては「非汝境界」。私がどんな思いで今日まで生き続けてきたのかあなたにはわからないでしょう。どういふものを抱えながら生きてきたのかあなたにはわからないでしょう。

常に私たちはこの「我自当知」と

「非汝境界」<sup>ひにまきようがい</sup>。ここに私たちの毎日の生き方が表わされているのではないでしようか。法蔵と世自在王仏とのやり取りとは違う私たち。どこまでも自分のことは自分が知っています。だから人からとやかく言われる筋合いはありません。その人とは他者です。他者といっても家族を含めてです。多くの者に自分というものをアピールしていくときには、やっぱり何か言われると困りますから、常に自分を正当化し自己弁護していく。そういうかたちで自分というものを常に前へ前へと押し出しています。そういう中で、自分のことは自分が一番知っていますと、ここに私たちは立って生きているのではないでしようか。

### 表と裏

その私たちに対して本当に自分のことを自分で知っているのかという問いかけを教えてください。一人に良寛という方がいます。良寛<sup>りょうかん</sup>という方が晩秋にあたって綺麗に紅葉したもみじを見ていた。晴れた日に風もなく紅葉したもみじが枝からヒラヒラと

舞い落ちてきた。その舞い落ちてきたもみじを見た時、五感を通してハッとされた。そしてハッとした中で作られたのがこういう一句です。

裏を見せ

表を見せて

散るもみじ

良寛

これからの季節、皆様方も紅葉を見に色んな所へ足を運ばれますでしょう。楓やもみじが秋の色に染まってきれいですね。しかし、その裏側はどうでしょう。葉脈のある方は、やはり汚れています。良寛さんは、散っていくもみじを見て、その姿の中に何を見たかです。

私たちは、私を含めてですけれども、人前に立った時、必ずどういふ面を常に表面にだしているのかと申しますと、好かれない自分。きれいな自分。そういうものを全面に出してきたのではないでしようか。第一印象として私という人をこんな風に見て欲しいというかたちで、そういう自分の素敵な部分、きれいな部分をなんとかアピールし続けてきた。その裏側には何を抱えているの

か。人には言えなくても、自分では分かる。汚れている部分、汚い部分、醜い部分、色んなものをちゃんと持っています。でも私たちは常に表の自分しか見せない。裏の自分を見せることができない。

ところが、もみじは「裏を見せ、表を見せて、散るもみじ」自分の正体をちゃんと見せていますよ。そこに良寛さんがハッとされたのでしよう。自分も裏の部分を見せられたら楽にやっていけるんだろ。それがこの句ではないかと私は読んでいます。

私たちは、自分のことは自分が一番知っています。だから、あなたからとやかく言われる筋合いはありませんと言っているものを常に出し続けてきた。本当は裏の自分も見せて楽になりたいのにそれを出来ずに堪えて、堪えて、我を張って、常に肩を張って、力を込めて生き続けてきたのが私たちではないでしようか。素直になれないのですよ、私たちは。素直な自分になれない。その素直になれないのに対して、法蔵と世自在王仏はそういう関係ではな

くてですね、あなたの起こした問いは非常に大事な問いです。しかし、その問いは他人に答えを聞くのではなくて、自ら尋ねていきなさい。こう言われて、法蔵はどうされたか。腹を立てたわけではありません。怒ったわけでもありません。また繰り返し教えて下さいとお願いたわけでもありません。ただ素直に自分のことが自分から分らないんです。私は一体何者で、何を求めて、どうなりたいたいのかわからないんです。なんと素直な方なんでしょう。

### 皆悉観見

そして、そのやりとりの中で法蔵は、世自在王仏に一つのお願いをしたんですね。「どうか二百一十億土<sup>にひやくいちじゅうおくど</sup>の命ある者が、どういふふうになんて、その命をどういふふうにいただき、そしてどういふふうになんていつたのかをどうか私に見せていただけませんか」と、こういうことをお願いされます。そして世自在王仏と法蔵は一緒に命の姿をひとつひとつ、どういふふうになんて命が生まれて、どんな過程を経て、どういふふう

うに命を終えていったかを最後まで見ていかれます。それを「皆悉観見」(『仏説無量寿経』・真宗聖典一四頁)。皆悉みなことごとくくすべて見たというのです。正信偈の言葉でいいますと「観見諸仏浄土因」とけんしよぶつじやうどいん。つぶさに見るとのことです。しかし、つぶさに見るということは、なかなかできることではありません。

つい九月の中旬でしたけれども、ある一つの研修会に参加しておりまして、その研修会の中である一人の青年が自分の今までの歩んできた道を語り始めました。なかなか本心を人前で語るといえることはできないことです。そして聞いていますと、私も自身も途中で辛くなってきたんです。「もうわかった」と止めたくなかったですね。もうそこまで十分だ。でも彼は涙を流しながら最後まで話しました。もう私自身も言葉をかけられないです。もう辛いから途中でやめて欲しいなという気持ちです。でも涙を流しながら最後の最後まで自分がどういふうに今日まで生きてきたのか、つぶさに語ったんです。

なかなか最後まで聞くということは難しいですね。

これ皆さんもそうでないでしょうか。友人あるいは家族の者が、色々な抱えていることを話し出した時に私たちは途中でもういいよ、もういいよとこういふうにして言いませんか。あなたが辛いのはもう分かったからもういいよ、もういいよと。最後まで聞くということが出来ない。

でも法蔵は、最後までつぶさに見たんですよ。ただ見ただけじゃないんです。聞き取るということをしたんです。ここが非常に大切なことなんです。私たちも、私たちと同じ時代の社会、同じ時間と場所を生きてきた方々を数多く見てきました。それぞれが生き続けてきた時間と場所の中で、あらゆる人たちがどういふうに暮らし、どういふうに命終えていったかということ私たちもつぶさに見ています。私たちは確かに見ているんです。しかし、見ているんですけれども、聞き取るということが抜け落ちていっているんです。

あの東日本大震災、もう三年半も過ぎました。しかし、福島から発信される言葉は常に忘れないでということ。忘れないで。なぜ忘れないけないのでしょうか。

私たちは、いつの間にかあの大きな出来事も過去のことにしてしまっているんです。今の自分の生活から見れば過去の出来事として、私たちは常に前へ前へ向かって歩んで行くことばかりを考えている。やはりそうではなくて、つぶさに見たことで、そこから聞き取るということをしなればならない。一人の人間が生まれて、そして何を悩み何に苦しんで、そして最後、命を終えていったのか。東日本大震災もそうですし、阪神淡路大震災もそうですし、八月の広島の土石流もそうですし、九月の御嶽山もそうですし、御嶽山においては五十六名の方が亡くなられて、まだ七名の不明の方がおられます。そして悲しいけれども、気象条件や色々な事を考えて昨日で一応の捜索が終わりしました。雪解けを待たなければならぬ。

一人のまだ発見されていないこ

家族が、ヘリコプターに乗って御嶽山上空からお父さんに向かって声をかけています。やはりその言葉から、何かを聞き取るということが大切なのでしょう。今まだ帰らない人を待ち続けている人、また戻ってきて欲しいと思いつても戻らなかった方。そういうひとつひとつを「皆悉観見」とけんしよぶつじやうどいん、つぶさに見たというんですよ。ありとあらゆる命の姿を。その時に法蔵は、何を感じたのでしょうか。一つは悲しみだと思えます。人間の悲しみです。またその悲しみを抱きながら生きなければならぬ、その尊さを見たのでしよう。ただの悲しみではないですね。悲しみを抱きながら生きなければならぬ人間の尊さです。

「皆悉観見」とけんしよぶつじやうどいん。ありとあらゆる命あるものがどういふうに生まれ、そしてどういふうに命終えていくのか、つぶさに見た。どの人生が善くて、どの人生が駄目なのか、若くして可愛そうであるとか、何が善いことと何が悪いことか、一切言えない。そういうものをつぶさに見たというのでしよう。「観見諸仏浄土因」とけんしよぶつじやうどいん

国土人天之善悪」、どの人生が善くてどの人生が駄目とか、何が善くて何が悪いことか、そんなこと言えないですよ。まさに靚見した時に人間の悲しみを見た。ただの悲しみではない。その悲しみの中に何が渦巻いているのかです。

### 呻きの底

例えば、私たちの歴史の中で、つぶさに見たというところをひとつの事柄として、皆さんも自分の体で、自分の目でその文字とその言葉に出会ってきた場所があります。広島という場所です。今から六十九年前です。広島と長崎に原爆が投下されました。八月六日と八月九日。その前にも大きな空襲で大きな土地が焼夷弾しょういだんによって焼きつくされまし

中継される。またその広島の市長が宣言する平和宣言は、文字となつて、言葉となつて、活字となつて私たちに伝えられます。そうしますと、あの「過ちは二度と繰り返しません」という言葉、文字、声になるまでにどんなことが起こったのでしょうか。広島でこういうことが起こってきたのでしょうか。

原子爆弾によって一変に何十万という方々が亡くなっています。実は広島という場所は、浄土真宗においては大切な場所です。私たちは加賀門徒といわれます。愛知県の方に行けば三河門徒といわれます。広島の方は安芸門徒といわれます。歴史の中で真宗に有縁の方々が多く住んでおられました。親鸞聖人の教えを聞いてきた場所でもあるんです。そういう場所の中に一度の原爆で多くの人が命を落とした。そこにはどんな声があるのか。憎さ、悔しさ、辛さ、腹ただしさ、色んなものが渦巻いたのではないのでしょうか。呻うめきです。声にならないけど呻うめきです。一人ひとりの人間の命が生まれ、そしてその命を精一杯生きた中で命終え

ていく。色んな出来事に出会ってきただ。その時そこには声にならない呻うめきがあるんです。腹ただしさ、悔しさ、憎さ、辛さ、悲しさ、そういう言葉の中でひとつの言葉が生み出されてきたのでしょうか。大事なのは、その言葉になる前です。あの「過ちは二度と繰り返しません」という言葉が生まれる前までに、何が起こったかです。今申したような呻うめきの中にあつて。

その呻うめきの底の底には何があつたか。ただの悲しみじゃないんですよ。祈らざるを得ないということですよ。手を合わせざるを得ないということですよ。それが起こったのでしょうか。広島と長崎に祈らざるを得ない、手を合わせざるを得ないものが起こった。それが言葉となつて、文字となつて、そして声となつて「過ちは二度と繰り返しません」と。多くの方々を通しながら、今でも原爆の後遺症を持ち続けている方々、原爆で大切な人を亡くした方々、色んな方々が言葉にならないものを言葉とし、文字に表し、さらに声として表したのです。

「過ちは二度と繰り返しません」、一つは誓いです。もうこういふうに人が人を殺していくような悲惨なことはあつてはなりません。また、もうしませんと誓うんでしょう。そして、もうひとつは願いです。誓いと同時に起こるのが願いです。世界中が平和で、人びとがお互いがお互いを尊重し合い、大事にしていくことを願います。それが広島市長が毎年毎年、繰り返して読んでいる平和宣言です。

### 誓願

あの何気ない広島の文字は、誓いと願いです。合わせると誓願です。誓願というのは何かというと本願です。しかし、いくら誓いがあつて願いがあつたとしても、それを聞き取らなかつたらどうなるのでしょうか。命ある方々が言葉にならないもの、呻うめきの中で言葉にし、文字にし、声になつて誓い願ねがったことを私たちが聞き取らなかつたらどうなるのでしょうか。聞き取らなかつたらただ見ているだけです。

広島市長、長崎の市長が平和宣



浄光寺の

まだ色づかぬ

大銀杏の下に

うからと

母をとぶらふ

竹村たみ

言を読み上げます。世界中に発信されるわけです。ところが現実の私たちの世界の中には今もシリア、アフガニスタン、イラク、イスラエル、パレスチナ、色んな所で紛争が絶えません。様々な人と人が大事にしていかなきゃならないのに、お互いがお互いを傷つけている。それは世界だけでなく、この私たちの家庭でもそうでしょう。お互いがお互いを大事にしている家庭や学校の中にあっても大事にできない。そうすると私たちは何をしているのか。聞き取るということをしていない。見ているだけなんです。見て

願いがあんならば願いがはたらきをもたないと、願いは偽物になつていくということです。ただ平和になつてほしいと願うだけならば本当の願いにならない。その願いがはたらきにならないと願いがなんにもならないのです。

法蔵がありとあらゆる命を見た。「とけんしよふじようどいん 観見諸仏浄土因、こくどにんでんしぜんまぐ 国土人天之善悪」です。自分の中では、まだ言葉にはなっていない。言葉にならないその呻きの中から、はたらきとして何かできないかと「こんりゆうむじよしゆしよがん 建立無上殊勝願、ちよほうほつけうだいぐぜい 超発稀有大弘誓」。超える、何を超えるものを起こしたのか。超える何かを起こしたんですよ。超えるのは何か。自分の思いですよ。自分の思いを超えるものが自らの中に発こつてきました。私たちは常に自分のことしか考えません。自分の願いや自分のことを中心として、まさに「がじとうち 我当知」、どこまでも自分中心です。法蔵はその自分中心の世界が破られましたと。ありとあらゆる命といえるものから聞き取った時、思いを超えて起こさなければならぬ

のが発こつてきた。これが本当の祈りの言葉でしょう。またその言葉は私たちは別の言葉使用の中で確かめていくことができます。

インドで亡くなられたマザー・テレサという方の言葉です。マザー・テレサという方は、インドという土地の中で誰からも救いの手を差し伸べられることもなく、道端で息を引き取つていかれる、そういう死を待っているような方々を家に連れて行き、介護し、看護してその人の生涯を看取つていった。そのマザー・テレサたち修道女たちが、アッシジの聖フランチェスコの中で祈りの言葉として、毎日毎日祈つた言葉があります。こんな言葉です。「私が慰められるよりも、私が人を慰めることができますように。私が人から理解されるよりも、私が人を理解することができますように。私が許されるよりも、私が人を許すことができますように。私が愛されるよりも、私が人を愛することができますように。どうかお力を下さい」これを毎日毎日、マザー・テレサ達修道女は、祈りの言葉とし

て祈り続けた。

しかし、この言葉は出来ないからできるようになりたいたいと祈っているのではないですよ。出来ないというところに立ったんです。とても私はそんなことが出来ません。いかがでしょうか。私たちは誰からも愛して欲しい、理解して欲しい、許して欲しい、慰めて欲しい、常に自分の思いでしょう。どこまでいっても自分なんです。もつともつと私のことを愛して欲しい。もつと私のことを理解して欲しい。常に私たちは自分となのです。しかし、本当の願いというものは、個人の願いではないんです。個人の願いを超えて命あるものに呼びかけている。その呼びかけが法蔵の中に、我が身の思いを超えて、「ちよほう 超発」、お 発こつてきました。発こつてきた時に、ありとあらゆる命をもっているその人間を、どういふうに呼んだかという、「苦悩を抱く者よ」と。男であるとか、女であるとか、子供であるとか、大人であるとか、人種が違う、民族が違う、そんな価値観ではなくて、ありとあらゆるものがみんな苦悩を抱く者な

のです。ここを見出したんでしょ。これなんですよ。ありとあらゆる命あるものは何を抱えている。苦悩を抱えている。ここを初めて法蔵は自らの中で見出された。それが「観見諸仏浄土因、国土人天之善悪」。しかし、ただ苦悩しているのではない。そこに尊さを見つけた。その尊さに対して、自分の思いを超えて起こさざるを得なかったものが、本願なのです。だから本願がなぜ起こってきたか。起こさざるを得なかったのは、この一点でないでしょうか。

### 本願に触れる

法蔵は、初めて私たちを苦悩の存在として見出された。その中に本願というかたちで願いが発こってきた。最初から本願があったわけではないんです。本願を起こさざるを得なかった、その大本です。それは私たち一人ひとりの有り様です。その有り様をいただいて親鸞聖人は、私たちにこんな言葉を投げかけてくださっています。「ここを以て、如来の本願を説きて、経の宗教とす。すなわち、仏の名号を以て、経の体

とする。」(『教行信証』経巻・真宗聖典一五二頁)。経というのは大經(仏説無量壽經)です。その大經というのは何を説いているのか。そしてその「宗」、つまり中心は何かというと、本願を説いています。その如来の本願が具体的に姿を表わす。「体」ですから、具体です。具体的に、どういうはたらきかというとな南無阿彌陀仏です。仏の名号です。私たちが一声、二声でも言う「南無阿彌陀仏」、その「ナンマンダブツ」と具体的に声となった名号は何を表わすのか。それは本願に触れるということなのです。ただ「ナンマンダブツ」と言っているようだけれども、実は本願の呼び声に触れているのです。「汝苦悩する者よ」、「苦しみを抱き生き続ける者よ」、「汝、我が名を称えよ」、仏さんからの呼び声です。それに「ハイ」と私たちが答えていくということ

です。「如来の本願を説きて、経の宗教とす。すなわち、仏の名号を以て、経の体とする」。つまり一声申す念仏の中で本願に触れるということなのです。その本願の呼び声の大本は、私たち

一人ひとりの存在です。苦悩を抱ける者です。その存在が法蔵に本願を建てさせた。つまり仏さまの方が、私たちのことをよく知っているとのことです。仏さまの方が、私たちがどういふ存在であるかということ、をちゃんと知っているんです。そこから聞き取る。改めてその本願のいわれである念仏の声を聞き取っていく、そこが大事なことでないかと頂きます。

本願が最初からあるのではなくて本願を起こさざるを得なかった。そこには呻きですよ。ありとあらゆる人間の姿、生き方、有り様をつぶさに見た。そこに法蔵が願わざるを得なかったものが発こってきた。その発こってきたものの中に、私たちが一人ひとり、「苦悩を抱いている者よ」と呼びかける。私たちのために呼びかけてくださっている。その呼びかけに対して私たちが答えていく、「ハイ」と返事していく。そこに本願の呼び声と目覚ということが発こってくるんじゃないかと思えます。

起こさざるを得なかった大本があるということ。そしてその本願にも

う一度私たちは気づいていくことが大切なことではないかと思えます。どうも失礼いたしました。

### 《へんしゅうこうき》

◇平成二十六年十月十七日、「浄光寺報恩講・大連夜」の法話録でございます。今年も法務ご多用中にもかかわらず、相馬先生にお話いただくことができました。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきます。

◇「教えを聞き取る」、私たちはこれまで教えを聞いてきましたが、本当に聞き取ってきたといえるのか考えさせられます。テレビ、新聞、インターネット、世界中の膨大な情報が耳を通り抜け、グローバル化したつもりですが、慢性的な情報の消化不良に陥った私たちは、反対に個人主義の中で自己主張の声ばかりが大きくなり、聞き取る力というものに衰弱している気がしてなりません。聞き取っていないということは、本当に出会っていないということなのです。自然や無数のいのち、そして自分自身に本当に出会っているのでしょうか。出会っているつもり、分かっているつもりになつていては、分らないでしょうか。さらには、そんなことすら忘れてしまっているのが私たちなのかもしれません。私たちが忘れていても、仏様は決して忘れることなく私たちに呼びかけてくださっています。そんな恩知らずの為の報恩講なのでしょう。恩知らずが集まり、南無阿彌陀仏に、そして親鸞聖人に出会いたい直す場、それが報恩講なのではないでしょうか。

### \*行事のご案内\*

「除夜の鐘・修正会」大晦日午後十一半

除夜の鐘のあと引き続き午前0時より本堂でお参りがあります。温かいものをご用意してお持ちしています。お誘い合わせご参詣下さい。